





「書写」1年 P.6-7「一 学習のはじめに」

6、7ページでは、小学校書写の毛筆と硬筆によって学習した内容や書写の要素を俯瞰できるようにし、8、9ページでは、基本点画が毛・硬筆の関連を図れるように示されています。

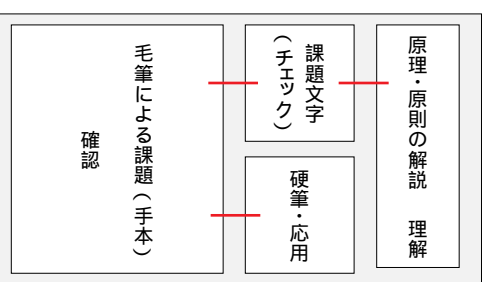
中学一年の学習の初めで、このような書写の学習への誘いや動機づけを行うことはきわめて重要であり、既習の内容を点在させることなく系統的に整理しておくことは、新たに始まる速書き文字学習の基盤ともなります。

行書の学習の工夫

中学校書写の主な学習内容は、速書きに適應する行書学習です。しかし、小学校で楷書による学習をしてきた中学一年生にとって、いきなり行書学習に入ることは抵抗があるようです。また、行書を学んだものの、行書学習の目的・意義が理解できないまま通り過ぎてしまうことも多いように思われます。26ページ「行書を知ろう」の「試してみよう」では、線や形、言葉の速書きを試み、そこに出現したさまざまな特徴を契機に行書学習に入ろうとしています。この実験的試みによって、行書学習は、単に楷書に続く新しい書体の学習でもなく、大人っぽい書体とか芸術的な書体を学習するのでもなく、速書きのルール（行書の特徴）の学習であることを興味深く印象づけるとともに、行書学習の動機づけとして活用できます。



「書写」1年 P.26「四 行書を知ろう」



「書写」1年 P.30-31

更しました。この方法が18年度版の教科書では、さらにはつきりとわかるような工夫がされています。これを図示すると次のようになります。

そのほかの教材の工夫

書写の学習は、文字を書く活動すべてに生かされる必要があります。新しい教科書では、日常の書式などが「書写の広場」として仕組み、応用が図られています。また、文字に関する知識を、「文字の秘密を探ろう」、「豆知識」「資料」などで取り上げ、文字を文化として考えられるような工夫も見られます。「発展的な学習内容」では、一年生以降で学習する「行書と平仮名を調和させる内容」が取り上げられ、当該学年の学習内容を超えて学習できるような配慮がなされています。

書写の基礎・基本を理解する学習方法

書写の学習がいわゆる手本に似せて書く活動に終始しがちであることはこれまで述べてきました。手本を大事にしてよく観察することは奨励すべきですが、書写の学習方法のあり方としては、正しく整った字形で、さらに速く書くために知識として知るべき原理・原則やルールがあり、それを理解したうえで技能向上を図るといった手順が効果的であると考えられます。まず手本ありきで似せることだけの学習では、原理・原則を見いだし、それをほかの文字に転用・応用することが難しいのです。この問題を解決するために、光村の教科書は、平成十四年度版から、原理・原則を右ページで図示解説し、その要素をもった別の課題文字で確認するという配列に変